マリンスポーツの視点から*1 相模湾における海面利用秩序の形成に向けて (地域主体のルールによる自主的な安全管理体制づくり)

内 山 俊 治*2

社団法人サーフ 90 交流協会

相模湾の海・浜の秩序ある利用計画について

三浦半島から湯河原まで東西 194 km にわたる相模湾沿岸地域は豊かな自然と文化の伝統に恵まれ、古くからの漁業の場としても名高いが、近年マリンスポーツのメッカとしても多くの人々に親しまれており、特に葉山から平塚に至る海域ではヨット、ウインドサーフィンなどのマリンスポーツが盛んになってきている。このことは共に海面を利用している漁業関係者にとっては定置網などの漁場が荒らされたり、騒音によって魚が逃げたり、漁船と衝突したりするなど迷惑なトラブルが発生する原因ともなっており、社会問題としても見逃せないこととなっている。

神奈川県では以前からこのことを憂慮して検討を行ってきたが 1988 年に海面利用のガイドラインともいえるべき「海・浜の秩序ある利用計画」を公表した。この計画は“人と海との共生”を基本理念に置いて施設整備等のハード面の充実と利用調整のルールづくりなどのソフト事業を組合わせた、将来の海・浜の利用ニーズの増大に対応するために新たな利用秩序を創造していくことを目的とした総合利用調整指針として策定したものである。

1990 年 4 月から 10 月まで相模湾一帯 (13 市、町) において開催された海の総合イベント『サーフ 90』(相模湾アーバン・リゾート・フェスティバル) は“人と海との共生”をメインテーマとして新しい海業の創造、環境に視点を当てた渚の美化活動、海面の利用に関する普及活動等を様々なイベントの中でアピールする一つの社会実験として試みたのである。

相模湾におけるマリンスポーツと漁業の現状

現在、神奈川県内 (相模湾) には県下最大の漁港である三崎港を始めとして 26 の漁港があり、そこを基地として様々な種類の漁業を行っている漁業組合は 26 組合で約 5,000 人の人達が専業あるいは遊漁等の仕事に携わっている。またマリンスポーツの面で見るとヨット、モ

ーターボートなどのプレジャーボート類が約 10,000 隻存在すると言われ、その半数程度が県内のマリーナや港に保有されているが、他は河川に放置されている状態で一つの社会問題ともなっている。

サーフィン、ウインドサーフィン、スクーバダイビングなどの愛好者は数知れず、相模湾の沿岸の浜辺や海岸は年間を通して多くの人々が集まってきており、海面・海浜の利用は年々複雑さを増してきている。一方漁業は様々な事情によって衰退の一途を辿っている。後継者不足、輸入増に伴う価格の低迷、魚離れなどの要素が主たる原因であるが、それでも残された多くの漁民は必死になって沿岸漁業や、沖合漁業などに取り組んでいる。その漁場で不特定多数の若者がマリンスポーツを楽しむために大事な仕事を荒らし回っているのを見れば不愉快限りなく、双方の間にトラブルが発生するのは当然のことと考えられる。ところが若者側にしてみれば海は誰のものでもなく海面の利用に関しての特定の法律も存在しないことから自由に楽しむことに何ら抵抗も示さない。この問題を解決する手段としての法的な規制は非常に困難であり、したがって相模湾に集う人々、特に若者に訴え、モラルとして考えてもらうことを主眼としたルールの制定が急がれたのである。

海面利用についての自主的ルール制定への道

1990 年の「サーフ 90」のイベントが終わったあとと実施主体であったサーフ '90 協会は「サーフ 90 交流協会」として再発足した。1991 年 4 月に再スタートした当初は任意団体として、翌年からは社団法人として現在に至っているが、主な事業はイベント終了後に公表された「サーフ白書」に提案された重点項目を具現化するためのものであった。特に海面の利用に関するルールの制定については今まで述べてきた相模湾の現状を打開するためには不可欠な要件でもあり、積極的に推進するように努めてきた。

*1 From view of Marine Sports.

*2 Toshiharu Uchiyama (Surf 90 Association, Kugenmakaigan, Fujisawa, Kanagawa 251, Japan).

相模湾の沿岸、特に湘南海岸と呼ばれている地域は全国有数のマリンスポーツのメッカであり、当然トラブルも多く、自主的ルール制定についても様々なケースが考えられた。

協会としてこの事業を進めるに当たっては基本的な条件を次の通り定めて実施することとした。

- ① ルールは一定の地域ごとに制定する。
- ② 海面の利用にかかわる諸問題はその地域の地元の問題として処理する。
- ③ 協会はコーディネーター役としての責務を果たす。
- ④ 迷惑料的な金銭の支払いは行わない。

以上の条件を基本においてルールづくりに着手したが、最初に行った事はまず相模湾内の海面を利用する当事者を限定することであった。その中で漁場を持つ漁業関係者とマリンレジャーを楽しむ人達の関係が最大の問題であると考え、加害者の立場と考えられるマリンレジャー側（スポーツ団体、マリンショップ、マリンスクール等）について調査を行った。マリンレジャー側は様々な団体が公式、非公式に存在しており、各団体は特に横の連絡もなく、まずそれらを組織化することを第一とした。

被害者の立場としては漁業組合が代表的なものとして想定され、組織として存在するので問題はなかったが当事者間を同じ土俵の上で相対させるまでにはかなりの時間を必要とした。なにしろ長い間双方に拘りがあり、また漁業組合側には積年の不信感があることで合意点を見出すまでは何回となく会合を持たなければならなかった。立場や考え方に大きな隔りがある者同士が海という舞台で共存共栄を図ることに相互理解を求めることはもともと無理なのかもしれないが、ただ相模湾一帯の現状は漁協側が少しずつマリンレジャーに対して歩み寄る気配が感じられた。海を利用して遊ぶことは大目に見るが、せめて漁業の邪魔はしないで欲しい、敷設してある網を壊したり、船の進路を妨害したり、漁場を荒らしたりしなければやむを得ないというふうに変化してきていると思うのである。またマリンレジャー側にしても地元の人と摩擦を起こすことは決して得策では無く、ショップやスクールの営業にも差し支えるので、漁業者とのトラブルはなるべく避ける対策を考えるようになってきていた時期でもあった。

協会としては1991年に調査を始めた後1992年の藤沢市片瀬東海岸、鎌倉市腰越海岸、1993年の逗子海岸、1994年の葉山海岸（森戸、芝崎、一色、長者ヶ崎）そして1995年の鎌倉海岸（材木座、由比ヶ浜、坂の下、七里ヶ浜）とルールづくりの制定を支援して実施して来たが、この間出会った関係者を含む多くの人々は協会の進めるこの事業については概ね好意的に受け取って頂くことができた。

時代の流れとタイミングが合ったことが一つの成果に繋がっていったと感じているが、制定されたルールが本来の意味で地元根付くのはまだまだ時間がかかりそうである。

ルールの制定内容は地域ごとに少しずつ異なるが主として次のように行われている。

- ① 禁止行為（船の高速航行の禁止、車の乗り入れ禁止、魚介類等捕獲の禁止など）
- ② 注意事項（定置網、養殖いかだ、操業中の漁船等に近付かない、船の転回注意など）
- ③ 遵守事項（ゴミは出さない、ライフセーバーの注意は守る、海のルールは守るなど）
- ④ 届出事項（事故の発生、レースの実施、イベントの実施、出航・帰着の届出など）

将来への課題

今までの4年間の実施結果の中で考えられる要点を挙げ、将来への課題としたい。

(1) ルールの制定に伴う経費負担・人材等について：県と地元の市町と関連団体の資金負担割合、人員派遣など将来に対する保証や方針の検討が急務であろう。

(2) 地域ごとに異なるルールの基本的な考え方について：国民全体が理解しうる海面利用の定義が必要であろう。

(3) ルール等の制定にあたる実施主体について：当協会が今日まで行ってきたルールの制定がある程度成果を挙げることが出来たのは県や市のバックアップがあるにせよ民間的体質を持った公的な法人だったことも大きな要素であったと考えている。

水産庁では2年前から海面利用室を設置して対策に当たっており、関係者による海面利用協議会を開いて対策を検討しているが、出来れば当協会のような団体を設立して積極的に取り組む方向で検討して欲しいと願うものである。